野 ゆ り の 会（西之表市）

発表者：目　迫　エミ子　氏

こんにちは。

野ゆりの会の目迫と申します。さて、野ゆりの会ってどんな会でしょう。ご報告いたします。

野ゆりの会の発足は、平成10年の９月です。ちょうどその１年ほど前に、種子島ですので、西之表保健所の呼びかけで「精神保健福祉ボランティア」養成講座の受講生募集というのがありました。精神保健福祉というあまり聞き慣れない呼び方と、それからもう１つ、ボランティア活動は、ちょうどそのちょっと前の阪神・淡路大震災の後で、ボランティア活動というのが非常にはやりになっていて、それへのあこがれもあったのだと思いますが、例えば、勤めの仕事を退職したり、あるいは子育てが終わって一息ついている、そういう主に女の人たちでしたけど、20数名がその講座に応募しました。

内容は、主に精神科のお医者さんの講義、それから保健師さんのお話とか、県の福祉に関係のある担当の方のお話などでしたけれども、私は特に、精神に障がいのある人たちのことについて、あまりにもそれまで自分が知らないことが多かった。それからまた、精神障がいの人たちに対する考え方も間違っていたということを非常に強く、思い知らされました。合計12、3回の講座でしたけれども、本当にたくさんのことを勉強させていただきました。

一方で、そのころ福祉に関するいろいろな国の法律の制定とかまた改正とかで、精神に障がいを持った人たちのためのいろんな手だてがありまして、特に保健所デイケア。家にこもっている障がいのある皆さんを連れ出して、保健所デイケアが始まったり、それが平成６年だったと思いますが、それからそのデイケアに子どもを通わせている親の人たちの目覚めと立ち上がりで、親もこれではいけないということで種子島地区の精神障がい者家族会「種子島会」

が立ち上がりました。

続いて、精神障がい者小規模作業所、鹿児島県ではこの作業所が開所したのが７番目だそうですが、離島ではもちろん初めての作業所が平成11年４月に開所しました。

私たちボランティア講座を受けた者たちの活動というのも、この小規模作業所の開所と同時に、多分、保健所のほうで保健所から手離して、障がいのある人たちだけでは何もできないというのがあるので、そのための養成講座だったと思うんですが、一緒に活動が始まりました。それこそ元気と希望を求めてこの作業所、「きぼう館種子島」という作業所ができたんですけど、そこにやってくる当事者のために私たちは、野に咲く清らかで優しいゆりの花のようにこの人たちを温かく見守り、自立に向けて一人ひとりに何か自分にできることを一緒にしてあげましょうというねらいを持って活動を始めました。

H.11.7.20　南日本新聞

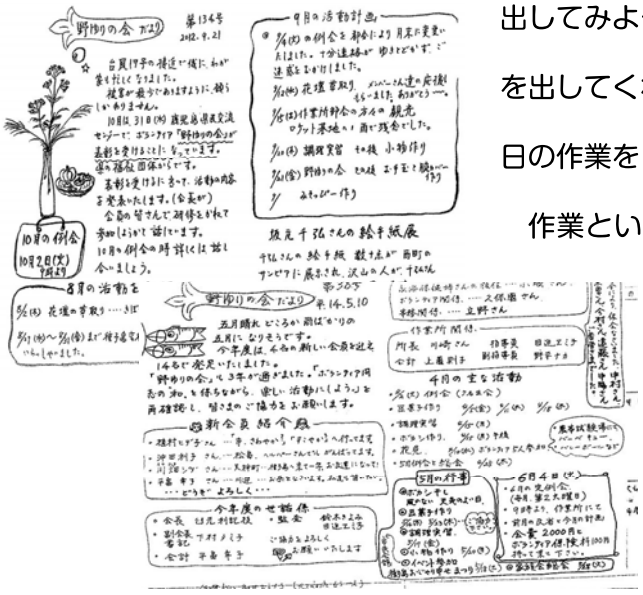
離島初の小規模作業所
「きぼう館 種子島」開設
西之表

自立への道目指して

小物作りに精出すボランティアと障害者＝西之表市

いきなり活動が始まったというわけでもなくて、このときの西之表保健所の保健師さんで、ボランティアを立ち上げたり、家族会の設立に力を貸したりとか、小規模作業所の開所に向けて一生懸命してくださった方がいらっしゃるんですが、その方のいろいろな手ほどきで、私たちは野ゆりの会の規約を作り、それからまた役員も初めから置いて、毎月１回定例会を持って、その集計として年に１回総会を持ったりしてうまく流れていくように、ボランティアですのでそれぞれみんな、例えば民生委員をされていたりとか、最近はヘルパーさんをしている方が多いんですが、そういう人たちでそんなに暇でのんびりしている人たちではなかったので、毎日、作業所に行けるわけではありませんから、そういう例会を持ったりして、うまく共通理解が図られるようにその保健師さんに手助けしてもらったおかげで、私たちの活動は途中で切れることなく続けられてきたと思います。

もう１つは、最初からではありませんでしたが、例会の終わった後、会の内容をＢ４の手書きの「野ゆりの会だより」というのを作って毎月発行をして、来られない人には郵便で、あるいは手渡しで必ず届けていましたので、ああ、このときは行けるとか、このときは顔を



出してみようとか、そういうので誰かが作業所に顔を出してくれて、通所の人たちと一緒にその日その日の作業をしました。

作業といっても、「きぼう館種子島」の建物を保健所の近くに借りたんですけれども、この建物は病院の跡で、長い間もう病院をやめて閉まっていまして、作業所を始めようとして開けたときはもう非常な中身でしたので、大掃除から始まりましたし、トイレにしても、電気にしても、そういう工事にも時間がかかりました。それに、実績がないところには、いきなり国等の補助金がありませんので、何か作業をするにも道具とか、材料もそうですが、何もないところでしたので、ボランティアの私たちが家のものを持ち寄って、作業を始めたのを覚えております。

通所してくるこの人たちは、心を休める、そういう場所としてもそうですが、作業所に行って作業をして、それを売るとお金がもらえる。作業手当がもらえるというのがもう何よりの魅力で、それでやってきてくれました。ですから、売ってお金になるそういうものをいろいろ私たちボランティアで、あれがいい、これがいいと知恵を出し合って、簡単に作れて材料費もあまりかからないで作れるものをと、そういう会も何回もしました。

また、ボランティアグループの私たちは年齢も重ねていましたし、生活経験も豊富ですので、アイデアもなかなかいいのが浮かんで、本当にみんなにびっくりされるようないいものが作れました。例えば最初に作ったのが、ほどいた毛糸でもできるアクリル毛糸でできる洗剤の要らないタワシです。20円とか30円でそのころよく売れました。

それから、カーテンとかテーブルクロス、あるいはスカートの生地をまた再生した使い

やすい腕カバーです。冬は長め、夏は短めと、こういうのも手づくりしました。ミシンも要るんですが、そのころミシンもなかったので、家の手持ちのミシンを持ってきてくれるボランティアさんもいました。今はこのお手玉、３個100円で売るんですけれども、これが認知症の予防にいいとかいうことで、イベントで出すと、とてもよく売れています。

こういうのは、お金が20円とか30円ですので、もっとお金になるものをというので考え出したのが、落花生と黒砂糖でつくるこれで、種子島にも、もちろん奄美大島にもあるんですが、ほかのところにないものをというので企業秘密で、きぼう館しか出せない味で、野ゆりの会しかつくれないという味で「きぼう豆菓子」というもの。これが人気商品で、きぼう館に買いに来てくださる人もいますし、市内のあちこちのお店にも置いてもらっています。

それからまた、ここに電話番号も書いてありますので、遠く東京とか大阪からも注文が来たりして、これはよく買ってもらっております。

こんなふうにして野ゆりの会は、当事者の皆さんが少しでも元気になるようにということで、いろいろ工夫をしてやってきているのですが、年度が進むにつれて、きぼう館そのものも、初めは小規模作業所だったんですけれども、ＮＰＯ法人にならないと補助が出せないとかいうことで、何となく最初の発足から形式的には変わってきています。中身はひとつも変わっていないんですけど、現在は、「地域活動支援センター」と大きな看板がきぼう館の建物には立っています。そんな感じで一生懸命頑張ってはおりますが、この受賞を機会に、「私たちは、またもう一度原点に戻って頑張ろう。」ということで、今回の受賞は非常に私たちの元気のもとになりました。

また、若いボランティアさんの加入もいろいろ考えております。今日は高速船で来ましたけれども、もっと飛行機にも乗って、あるいは新幹線にも乗って遠くに出かけて、私たちの学習も深めたいと考えております。

これからも頑張っていきたいと思います。受賞ありがとうございました。

報告を終わります。